

『午後2時50分』改訂版 作・小松千江子

(登場人物)

崎田里香(27歳) 弓谷美樹

須藤祐二(31歳) 伏貫てつや

謎の老人(72歳) りゅう雅登

.....

SE ピンポーン(エレベーターの音)

老人 「(大声でゆったりと) 乗りますか?」

祐二 「(オフ) すみません! (オン) 7階お願いします」

里香 「(オフ) 待ってエ。(オン) よかった! 私も7階です」

SE ガタガタ・ガタン(エレベーター、揺れて止る)

里香 「キャッ! 電気が消えた」

老人 「地震かな?」

祐二 「大丈夫。予備灯がついている。ちよ、ちよっと待ちましょう。えーと・・・
2時50分か! 間に合うかな」

SE 携帯電話の操作音 IN↓B・G

里香 「んもう、非常釦も全然つながんない」

祐二 「け、携帯電話・・・圏外だよ。クッソ」

里香 「お急ぎなんですか?」

祐二 「3時からプレゼンなんです。この企画、俺がいなきゃ絶対ダメなんですよ。今日、決めようと思ってたのになあ・・・」

里香 「いいですね、必要とされてて。私なんてエレベーターが永遠に開かなくても誰も困らないんだろつな。5年も働いてるのに、今だに雑用ばかりだし」

老人 「ふふふ、お二人さん。待っている間にちょっと楽しんでみるかい、こ

魔法の玉で？ 天の声が聞こえるんだ」

祐二 「マジかよ」

里香 「聞きたい！私、どうせ暇なんですから」

老人 「じゃあ、お嬢さん。左手を出して。この玉を握って、目を閉じてごらん」

里香 「あ、部長の声……え？ そんな……」

老人 「聞こえたかい？」

里香 「はい！ 崎田君はどこにいったらいいんだって。あの子じゃなきゃダメなんだって。それに、今度、企画室に移動かもって。やった！！ 私もまんざらでもないってこと？」

祐二 「ぼ、僕もお願ひ……します」

老人 「左手にしっかり持って。目を閉じて」

祐二 「はい……ええっ、俺の代わりに山本が行った？ いつもより、クライアントの反応がいい？ ウソだろう……」

老人 「ウソじゃない。天の声さ。ハハハハ」

里香 「私、すぐ帰って、部長の用事やってあげなきゃ」

SE ドンドンドン（扉を叩く音）

里香 「ねえ、誰か助けてよお！」

祐二 「あ、電気ついた」

里香 「今、何時かしら」

祐二 「どういうこと？ さっきと同じ2時50分だよ」

SE ピンポーン（7Fです）

老人 「7階じゃよ。お二人とも行ってらっしゃい」

里香 「ありがとう」

祐二 「おい、ジジィ……なんだよ、さっきのは」

老人 「ん？ 君たちの心の声じゃよ、（エコー）ハハハ」

M 引き取ってエンディング